

ARCA DIA

岡崎市美術館ニュース〈アルカディア〉
OKAZAKI CITY MUSEUM NEWS

108
AUTUMN
2026



市制一一〇周年・開館三〇周年記念展

「四季にうたえば―出光美術館名品展」

井原 凜

会期…十月十七日(土)～十一月二十九日(日)

市制一一〇周年・開館三〇周年を記念しまして、当館では十月十七日(土)より「四季にうたえば―出光美術館名品展」を開催します。

出光美術館は、出光興産株式会社の創業者である出光佐三氏(一八八五～一九八一)が七十年余りの歳月をかけて収集した美術品を展示・公開するため、昭和四十一年(一九六六)に東京都千代田区丸の内を開館しました。国宝『伴大納言絵巻』を始め、国宝二件・国指定重要文化財五十七件を含む、約一万件の日本・東洋美術の名品を所蔵しています。近年では、伊藤若冲を中心とする心遠館コレクションを新たに収蔵し、大きな話題を呼びました。

本展覧会では、そんな出光美術館の名品の中から選りすぐった、様々に描かれた四季の表現を皆様にご紹介いたします。

展覧会の魅力をお伝えすべく、本稿では展覧会の構成とぜひ見て欲しい私の一押し作品についてお話いたします。

■第一章 美しい季節・美しい風土

大陸から絶妙な位置にあり、加えて暖流と寒流が回りを流れるという環境は、日本列島に「四季」という風土を与えました。

この「四季」は、気候の変化だけでなく、そこに芽吹く草花たちにも変化を与えました。草花の変化は、季節の移り変わりを感じさせるものとして古来から現代に至るまで沢山の人々に愛されています。蕾をつけ花開かんとする桜からは春を感じ、徐に色づく紅葉からは秋の訪れを想起させられます。本章では、このような自然の移り変わりから季節を感じるという鋭い感性が育んだ作品を紹介いたします。

第一章の一押し作品は、江戸時代後期に活躍した絵師、酒井抱一(一七六一～一八二八)による『ハッ橋図屏風』(図1)です。この作品は、三河国八橋(現在の愛知県知立市)に辿りついた主人公が、都に残した妻を思い、

からこるも きつつなれにし つましあれば

はるばる来ぬる たびをしぞ思ふ

という「かきつばた」の語を用いた歌を詠んだという『伊勢物語』東下りの段のお話を題材としています。本作は、人物を描かず、燕子花と斜めに配された八橋のみで構成されています。この構図に加え、絵絹に金箔をおすという一般的な金

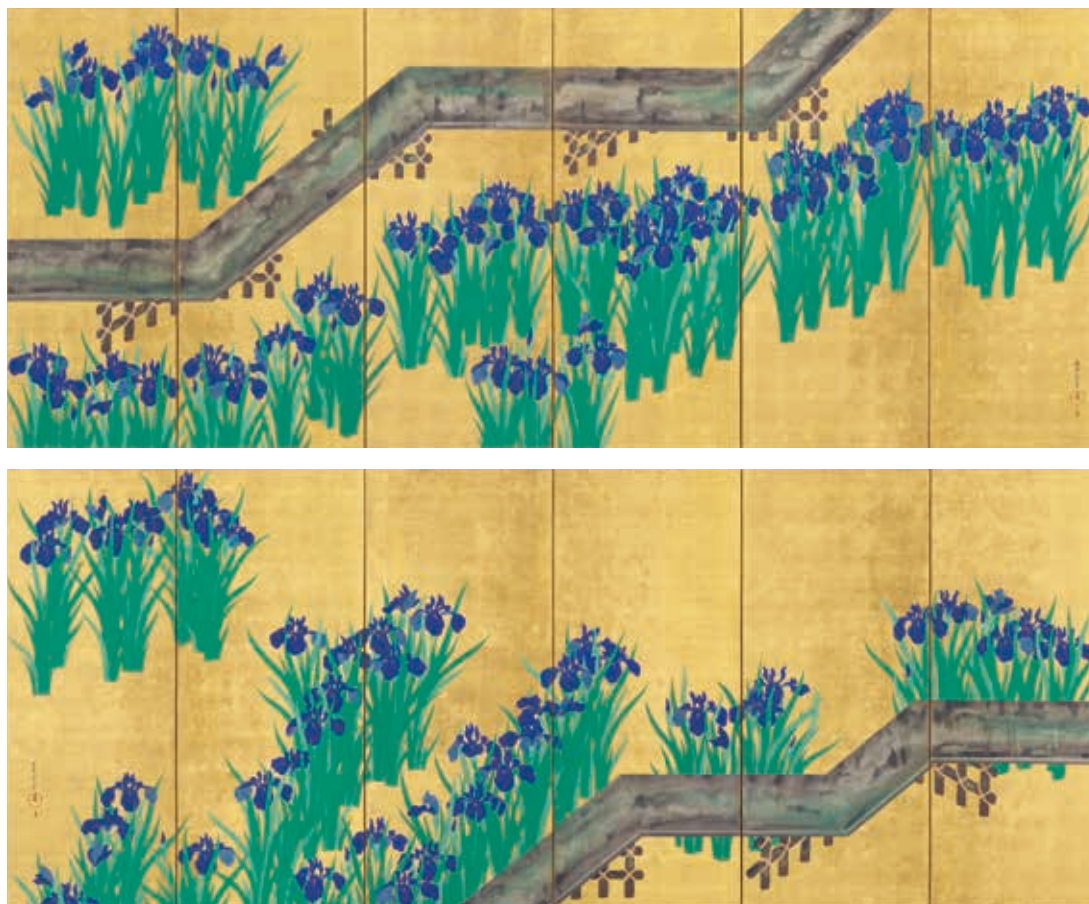


図1 酒井抱一『ハッ橋図屏風』江戸時代後期 出光美術館蔵

地の屏風ではあまりみられない技法が『八ッ橋図屏風』には用いられています。抱一の創意工夫が随所にみられる作品です。三河地方の名所を描いた屈指の名作を、是非ご堪能いただければと思います。

第二章 花鳥画を鑑る

四季をテーマにした作品には、各季節にちなんだ草花や鳥たちが描かれています。これは、桜といえば春、燕子花といえば夏、薄といえど秋、椿といえど冬、というように四季と花たちが密接に関わっている証拠と言えるでしょう。

さて、花や鳥を描いた、いわゆる花鳥画には、具体的にどんな花や鳥が取り上げられていたのでしょうか。この問いについて考えるときに参考になるのが、藤原定家（一一六二―一二四一）が建保二年（一二一四）二月に後仁和寺宮道助法親王の求めにより詠んだ、花と鳥の歌です。「定家詠月次花鳥和歌」と呼ばれるこの和歌は、二月は桜と雉、九月は薄と鶉、といったように十二カ月の各月にちなんだ花と鳥を詠んでいます。これらの花鳥は、後に月々を代表するものと目され、絵画に描かれる代表的な花や鳥たちとなりました。

しかしながら、江戸時代中期（十八世紀）になりますと絵画に描かれる花と鳥の選択に大きな変化が訪れます。向日葵や柿、鳥や蝶など、これまで画題として全く取り上げられなかった花鳥や虫が描かれるようになったのです。

本章ではこのような絵画に描かれる花鳥の変化に着目し、「定家詠月次花鳥和歌」に取材した作品から江戸時代中期以降に描かれるようになった新しい花鳥画まで、様々な花と鳥の表現をご紹介します。

第二章の一押し作品は、図1と同じ酒井抱一による作品、『十二ヵ月花鳥図』です。『十二ヵ月花鳥図』は、全十二幅で構成された作品で、十二カ月の各月にちなんだ花と鳥が一幅ずつ描かれています。このような月ごとに季節に相応しい花と鳥を組み合わせた花鳥画は、「月次花鳥画」と呼ばれ、やまと絵の伝統的な画題でした。

そんな伝統的な花鳥画の形で描かれた『十二ヵ月花鳥図』の十二幅のうちの十月を描いた一幅が、図2になります。こちらをよく見てみると、描かれているのが柿と鳥ということが分かるかと思えます。柿と鳥は先述した通り、伝統的な花鳥図では画題として選ばれることがなかった、大変珍しい組み合わせです。

実のところ、抱一の『十二ヵ月花鳥図』では十月以外にも、四月の薔薇や七月の向日葵など今までの花鳥画では描かれることがなかった花たちが画題として選ばれています。伝統的な「月次花鳥画」の様式をとりつつも、画題の選択で新しい組み合わせを試みた本作は、新しい花鳥画を代表する作品といえるでしょう。

本展覧会では、こちらの『十二ヵ月花鳥図』を十二幅全て展示いたします。同章には『定家詠月次花鳥和歌』に取材した作品も展示しておりますので、ぜひ描かれている花鳥に着目しながらご覧いただければ幸いです。

第三章 四季に生きる

春の桜前線や、秋の紅葉狩り情報など、季節の訪れを知らせるマスコミの報道は年々加速の一途をたどっています。季節と共に花を愛するという日本人の気性は、今も昔も変わらないようです。

本章では、四季の移ろいとともに生きた人々の様子を、浮世絵や風俗画といった作品たちから覗いてみます。

ここで第三章の一押し作品をご紹介します。といたって所ではありませんが、作品の魅力を皆様にご紹介するには紙面の余白が少々足りない……。ということで、是非広い展示室でみなさまの一押し作品を探していただければと思います。

展覧会がスタートする十月は、紅葉が色づき始め、涼しい秋風が秋の訪れを知らせる頃かと思えます。日本各地から紅葉の見ごろの便りが届き、紅葉狩りを計画されている方もいらっしゃるでしょう。

そこで、本格的に紅葉狩りに赴く前に、美術博物館で「四季」を体感してみるのはいかがでしょうか。春のお花見から冬の雪景色まで、様々な「四季」が皆様のご来館をお待ちしております。



図2 酒井抱一『十二ヵ月花鳥図』
(十二幅のうち十月)
江戸時代後期 出光美術館蔵

EVENT INFORMATION

ギャラリートーク

担当
当館学芸員

日時
①10月25日(日)
②11月27日(金)
各日とも14時～

会場
当館1階展示室
(開始時刻までに展示室
入口前にお集まりください)

参加費
無料
(ただし、当日の
観覧チケットが必要)

この他にもイベントを開催予定!
詳しく当館ホームページをご
確認ください。



家終い・終活が民俗資料収蔵にもたらす影響と、現場学芸員のジレンマ

伊藤 久美子

近年、全国的に「家終い」や「終活」が進むなかで、博物館に寄せられる寄贈照会が急増している。終活や親の高齢化などによって空き家になった土地建物、生活財を処分する家終いが増加しており、これは民俗資料収蔵の現場に大きな影響をもたらしている。

家終いの増加は、社会構造の変化と密接に結びついている。核家族化と少子高齢化により生活財が引き継がれにくくなり、空き家率が上昇している。空き家にはこれまで収蔵されてこなかったモノ、されにくかったようなモノが手つかずのまま残されており、空き家が民俗資料の新たな供給源となり得る。

この現象は、博物館にとって「危機」と「機会」を同時にもたらす。「危機」としては、第一に資料の大量流入がある。寄贈希望の多くは「役に立つものがあれば何でも寄贈する」という申し出であり、その大部分は収蔵できずに廃棄される。収蔵庫の容量は限られており、残されたモノの大半は収蔵できず、一点一点確認し収蔵すべきか検討する必要性に迫られる。選別作業の負担は増大している。

第二に、資料の「現在性」が失われている点がある。家終い資料の多くは使用者がすでに亡くなっており、「実家に古いモノがあつて、よくわからないけど、要りますか」という状態で持ち込まれる。民俗資料は本来、使用状況や背景情報が価値の核心であるため、情報が欠落した資料を収蔵することは、後世の研究

に負担を残す可能性がある。しかし、資料そのものが消滅すれば地域文化の痕跡は完全に失われる。この「情報の欠落を抱えたまま残すべきか」という判断は、現場の学芸員にとって大きな悩みとなる。

一方で、家終いは博物館にとって大きな「機会」でもある。従来は収蔵されにくかった下着、家計簿、包装紙、広告、消耗品、集落の共有物などが空き家から発見されることで、生活文化の空白を埋めることが可能となる。生活の細部を示す資料がまとまって出現する状況は、民俗学的にも重要である。

また、個人コレクションや家族写真の発見も大きい。家族写真には、その時代の歴史・風景はもちろん、服装や有形民俗資料などが一緒に記録されている。モノの使い方を知らずで重要であり、無形民俗資料の補完としても価値が高い。昭和から平成期の郷土玩具、職人の道具、地域産業の記録など、体系的に収集されたコレクションが見つかることもあり、地域文化の再評価につながる。

こうした状況は、二〇二二年の博物館法改正とも深く関わる。改正博物館法では、博物館の役割として「地域文化の保存・継承」「地域社会との連携」「資料の適切な収集・保存・活用」がより明確に位置づけられた。家終いによって大量の生活資料が流入する現状は、まさに改正法が求める「地域文化の継承」の最前線であり、博物館は地域社会の変化に

応じた収蔵方針の再構築を迫られている。

ここで重要となるのが、民俗資料に日々対峙する学芸員のジレンマである。学芸員は、資料を前に「これは地域の文化を語る最後の証言かもしれない」と感じながらも、収蔵庫の限界から受け入れを断らざるを得ない局面に直面する。また、情報が欠落した資料を収蔵することへの不安、寄贈者の善意と博物館の選別方針の間で揺れる葛藤など、現場には制度では語りきれない重い判断が積み重なっている。地域の博物館として住民との信頼関係を維持しつつ、文化財としての価値判断を行うという二重の責任は、学芸員にとって大きな精神的負荷となる。民俗資料の収蔵は単なる「モノの受け入れ」ではなく、地域の記憶や人生の痕跡と向き合う仕事だからこそ、葛藤も深くなる。

総じて、家終いや終活の進展は、博物館にとって収蔵体制の限界を突きつける一方で、地域文化の最後の証言者となる資料を発掘する貴重な機会でもある。改正博物館法の理念を踏まえつつ、資料の選別基準の明確化、聞き取りの補強、デジタル化の推進、地域との協働など、多面的な対応が求められている。家終い、終活は単なる生活財の処分ではない。地域文化の終わりと継承の境界に立ち会う行為であり、博物館が民俗資料を収集するという仕事は、その変化を記録し未来へ伝える役割を担っている。

学芸員のジレンマ (図式化)

① 収蔵スペースの限界

残したい資料

物理的に残せない現実

選別の苦悩

② 資料の背景情報の欠落

使用者が亡くなり
情報が得られない

資料価値の判断が困難

「残すべきか／
残せないか」の葛藤

③ 寄贈者との関係性

善意の寄贈

博物館は
選別せざるを得ない

断ることによる
関係悪化の懸念

④ 地域文化の保存責任

資料は地域文化の
最後の証言

収蔵できなければ
文化の断絶

使命感と現実の板ばさみ

⑤ 法制度・理念とのギャップ

博物館法は「地域
文化の保存」を求める

現場は人員・予算・
収蔵スペース不足

理念と現場の乖離

連載

本多家の家臣団 7 〈本多忠勝の家臣団⑦〉

湯谷 翔悟

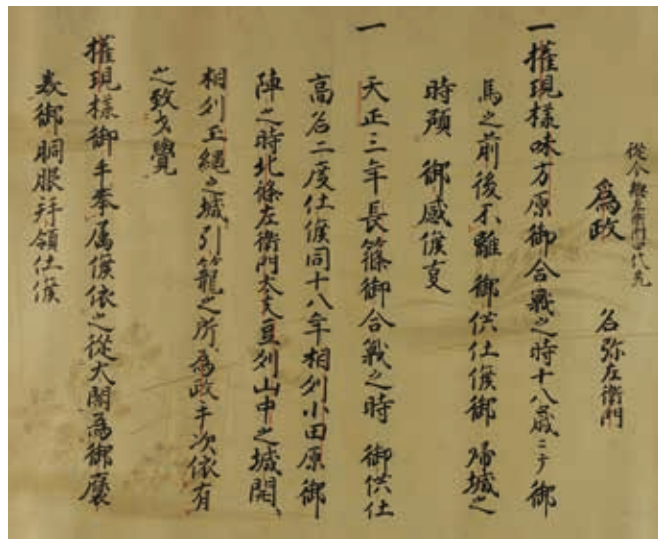


写真1 都筑氏先祖書（当館蔵）

秀綱の子 弥左衛門為政は、元和八年（一六二二）六八歳没とされるので、弘治元年（一五五五）生まれとなる。彼の活躍で特筆されるのが、天正一八年（一五九〇）の小田原攻めのことである。『寛政譜』都筑為政条には次のように記されている。

小田原御陣のとき北条左衛門大夫氏勝、山中の城を去りて甘縄の城にたて籠るのとき、おほせをうけたまはりて、為政及び甘縄の大応寺龍達・松下三郎右衛門某等と、もに御書を持し、甘縄城にいたり、御味方に属すべきむねを説く、氏勝終に命に應じ、城をさげ渡せしかば、豊臣太閤功を賞し羽織を賜ふ

甘縄城開城の功績については、貞享元年（一六八四）に幕府へ提出した草案をもとに、貞享三年に清書された先祖書にも記載されている（写真1）。先祖書では恐らく省略されたのであろうが、『寛政譜』ではこの開城は、甘縄大応寺の龍達（続群書類従完成会発行の新訂増補『寛政譜』では「就達」となっているが、これは翻刻の誤り）と松下三郎右衛門某、為政の三人が命じられて任に当たったと記される。では、為政以外の二人は誰なのか。そもそもなぜ為政らが使者に任じられたのか。

これについては、既に安藤嘉則氏が言及している。良達（龍達）は為政の叔父で、良達は玉縄北条氏の菩提寺 大応寺の住職であった。深く帰依する良達の説得により、玉縄に籠る北条氏勝は開城したと指摘する。また良達は松下三郎左衛門の叔父とする史料もあるが、これは為政の誤りであるとしている。

これも安藤氏が指摘するように、『寛政譜』本多忠勝条には了達（良達）は為政の叔父とされている。また『譜牒余録』にも、都筑弥左衛門と「伯父」の大応禪寺龍達が説得したと記されている（写真2）。『寛政譜』で良達は、前回（No.106）紹介した秀綱の弟、千手院の兄に位置付けられている。紹巴が訪ねた際に面会していないのはたまたま不在だった

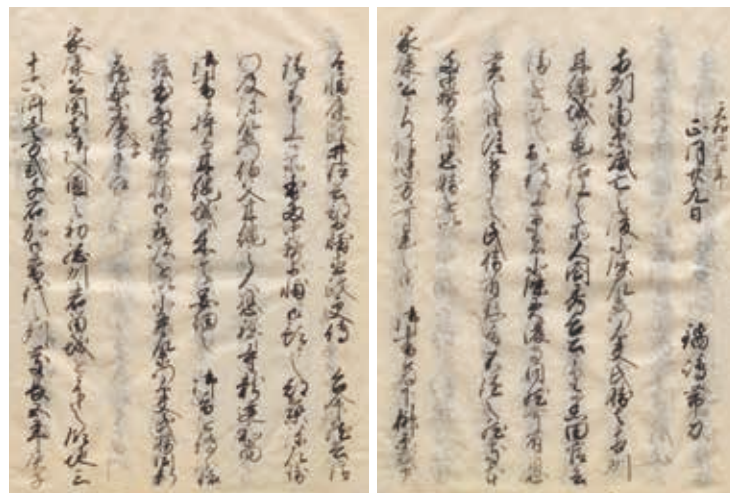


写真2 譜牒余録後編巻第10（国立公文書館所蔵）

のか、それとも既に都筑家を離れていたのかは不明である。

都筑為政は、玉縄北条氏菩提寺住職の良達との血縁を活かし、北条氏勝の玉縄開城を達成した。その功績は、秀吉から直接賞賛されるほどであった。

ただし松下三郎左衛門が何者かについては、安藤氏は言及していない。都筑氏から離れてしまうが、少しみてみよう。（続）

《参考文献》

安藤嘉則「近世曹洞宗における関三利成立の諸問題―下総総寧寺を中心に―」（『駒沢女子大学研究紀要』二〇、二〇一三年）

博物館実習 実施報告

山下 葵

当館では学芸員資格取得を目指す学生の方の博物館実習を受け入れていきます。昨年度は当館が改修工事のため実施できませんでした。今年度は無事に再オープンを迎え、四名の実習生を受け入れることとなりました。当館では五日間の実習を行い、その主な内容は次のとおりです。

- ・美術博物館の施設見学
- ・展覧会の企画から実施まで（座学および見学）
- ・教育普及事業について（座学）
- ・資料の修復および保存について（座学および実技）
- ・美術作品、歴史資料、民俗資料の収集から保存管理までについて（座学および実技）
- ・ギャラリートークの準備および実施（実技）

ご覧のとおり、内容は多岐にわたります。当館は取り扱う資料・作品の幅がとて広いミュージアムのため、それにとめない、実習生のみなさんにも多くのことを体験していただきました。

●施設見学

いつもは見ることのできない、美術博物館の裏側を見てもらいました。美術博物館という大きな展示・収蔵施設を支えるために、様々な機械が絶えず動き、そしてそれを管理する人たちがいます。美術館・博物館を支えているのは学芸員だけではありません。多くの人々によって運営がなっていることを知ってもらったことだと思います。



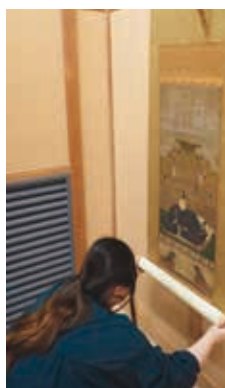
施設見学の様子

●作品・資料取り扱いの実践

幅広い作品・資料を多数収蔵する当館。絵画の取り扱い、歴史資料（掛軸）の取り扱いなどを学びました。

歴史資料の取り扱い実習では、多くの実習生が初めて掛軸を手にしたのですが、上手に掛軸を掛け、巻くことができていました。

掛軸が曲がらないように慎重に取り扱う姿は印象的で、ひとつひとつ丁寧に扱う姿に、「作品・資料とそれを守ってきた人に対して敬意を払う」という当館学芸員の思いをしっかりと受け止めてくれたと思います。



資料取り扱い実習
掛軸を巻く様子

●ギャラリートークに挑戦

本年度の博物館実習では、初の試みとして実習生のみなさんにギャラリートークをしてもらいました。当時開催中だった企画展「窓―そこに介在するもの―（会期…令和八年七月四日～九月十三日、以下「窓展」）を鑑賞し、四人で分担して展示解説を行いました。解説する作品選びから、説明の仕方まで、実習生四人で決めてもらいました。職員から提示したポイントは二つ。①なぜその作品を選んだのかということ。②作品をじっくりと見なければ気づかないこと。この二点を解説の中に盛り込むようにというルールにしました。

初めて出会う作品に真剣に向き合い、自分なりの見方・解釈を五日間の実習をとおして言語化しました。

窓展は、当館の多岐にわたる作品・資料を「窓」というキーワードで紹介する展示で、展示物の説明よりも各章の説明が難しいようでした。自分なりの「窓」をそれぞれが模索し、お客様に説明してくれました。

五日間、様々な大学から集まった四名の実習生のみなさんが当館で活動してくれました。学芸員という仕事について、少しでも興味深く学ぶ機会になっただけ嬉しそうです。将来、学芸員になるかはわからないというみなさんでしたが、この五日間の学びが、この先のどこかで役立つことを期待しています。これからそれぞれの未来に向

かって進んでいく実習生のみなさんの活躍を祈っています。



ギャラリートークをする実習生。たくさんのお客様にご参加いただきました。



再オープン・雑感

湯谷 翔悟

二〇二四年九月からの長い休館を経て、二六年七月四日、ようやく再オープンを迎えることができました。お客様の声が聞こえるというのは、やはり嬉しいものです。

改修工事による長期休館は過去二回の展示は、二〇一六年《大鎖国展》・二三年《どうする家康》でした。奇しくも両方とも私が担当させてもらいました。再開一本目の展示は特有の難しさ緊張感があり、やりがいはあるけどなかなか大変です。

そんな過去二回と違い、今回の《窓》展は収蔵品展での開催でした。近年の収蔵品展の開催は、二〇二二年《名取春仙》展、二一年《美術にまつわる五つの話》展以来。歴史資料も含めた展示となると、一八年の《美博びっくり箱》以来となるようです。

《窓》展は開館から三〇年の歩みを示すものでもあったため、初公開や久しぶりのお披露目の作品も多数ありました。個人的には有綱銘の太刀をお披露目できたことが一番でした。初めて受入れを担当した資料ということもありますが、寄附をご決断された時、ご所蔵者のすっきりとしつつも寂しげなお顔が強く印象に残っていたためです。こうして皆様にご覧いただけたことで、僅かなりとも任を果たせた心持ちです。

他にもアンケートなどで「こんな素晴らしいものも持っていたんだ」といった声もお見かけしました。ただこれは、所蔵しながら長らくお見せでき

ていなかったことも意味しており、申し訳なくあります。

常設展示のない当館では、収蔵品をご紹介する機会が限られてしまっています。再オープンに合わせて、収蔵品データベースの公開を開始しましたが、充実はまだまだこれからです。

ただ、収蔵品を活用していかないという訳ではもちろんありません。過去一七二回の展覧会は、収蔵品をきっかけとした企画展も多いです。また、収蔵品の貸出しや調査で培った他館とのネットワークが、当館の活動の円滑化に寄与した例は数えきれません。資料を集め・伝えるという活動は、博物館の使命であるとともに、博物館の力をつけていくということに他なりません。

今回の《窓》展では、当館学芸員各人の関心に拠った展示もありました。南蛮漆器や刀剣、浮世絵の遠近表現にこだわった比較展示や甲冑のパーツごとの展示など。この数年で学芸員の顔ぶれが大きく変わり、若返りました（自分を除く）。メンバーが変われば専門も変わります。当館のような小さな館では、専門だけを担当するということは難しいですが、関心のある収蔵品を起点に調査を進め、自身の武器を磨いていってもらえたらと思っています（自戒を込めて）。

…と徒然と書いてきて、全部自分に返ってくる話じゃないかと、パソコンに向かう背中が小さくなってきました。収蔵品を活かすも死蔵させるも、畢竟、学芸員の腕一つ。頑張ります。

市内中学生による「未来の美術博物館」作品を募集します

締切 令和9年2月2日（火）23時59分

テーマ 未来の美術館・博物館

応募資格 市内の中学生

応募規定

- ① 八つ切りサイズ（27cm×38cm・タテヨコ自由）以内の画用紙に自由に絵を描いてください。
- ② 応募点数は、1人1作品までとし、本人が描いた未発表のもの。
- ③ 画材は、絵の具、クレヨン、色鉛筆、油性マーカー、サインペン。
- ④ 応募作品は展示期間終了後、返却します。
- ⑤ 個人での応募に限る。
- ⑥ 応募作品はアニメのキャラクターを含む著作権のある作品、商標権、肖像権などが含まれていないものに限り。

応募方法・デジタル審査

- ① 作品の画像データをご用意ください。
- ② スマートフォンの内蔵カメラ、デジタルカメラで撮影してください。
- ③ 画像ファイルは10MB以下にしてください。
- ④ ファイル形式はjpg、png形式に限りです。
- ⑤ 応募フォーム（Google）へ必要事項を入力・作品（①の画像データ）を添付いただき、応募手続きを完了してください。（応募フォームは右記のQRコードよりアクセスください。）
- ⑥ 応募完了画面または、完了メールに記載の「受付番号」・応募者（ご本人の「学年」と「名前」）を、作品の裏面へ明記し、保管してください。
- ⑦ 一次審査通過者のみ、応募作品（原本）をご持参いただきます。
- ⑧ 一次審査通過者のみ、通知します。※持参日などの事項
- ⑨ 作品持参の際、折れ曲がらないようにしてください。
- ⑩ 応募フォームの必須項目に入力不備のある作品は審査の対象外とさせていただきます。
- ⑪ 注意
- ⑫ 一次審査は、お送りいただいた画像で行います。
- ⑬ 応募時は作品を送らず、保管しておいてください。一次審査通過者には、通知などのご案内をしますので、応募フォームには、ご自宅の住所、連絡のつく電話番号を必ずご記載ください。

選考・発表

- ① 作品の審査は特任館長を始め、当館学芸員にて行います。
- ② 「大賞・最優秀賞」、「特選・優秀賞」、特別賞等の入選作品は、準備出来次第、館内において展示します。
- ③ 対象の方へは2月24日（水）までのご案内いたします。また、大賞及び特選の作品は、当館HPにて掲載します。
- ④ 入選されなかった方への通知はいたしませんのでご了承ください。

SHOP INFORMATION



1928年、広島で創業したマルニ木工。「工芸の工業化」をモットーに、創業から100年近く経った今でも木工家具をつくり続けています。

代表作のひとつである「HIROSHIMA アームチェア」は、米国の Apple 本社「Apple Park」に数千脚が採用されるなど、日本が世界に誇る椅子です。

木の塊から削り出されたパーツを繋ぎ合わせた美しい曲線の背もたれが身体を優しく包み込んでくれます。

また、マルニ木工は2006年、シンプルで品質が高く、普遍的といえるアイテムを集めたプロジェクト「60VISION」に参加。

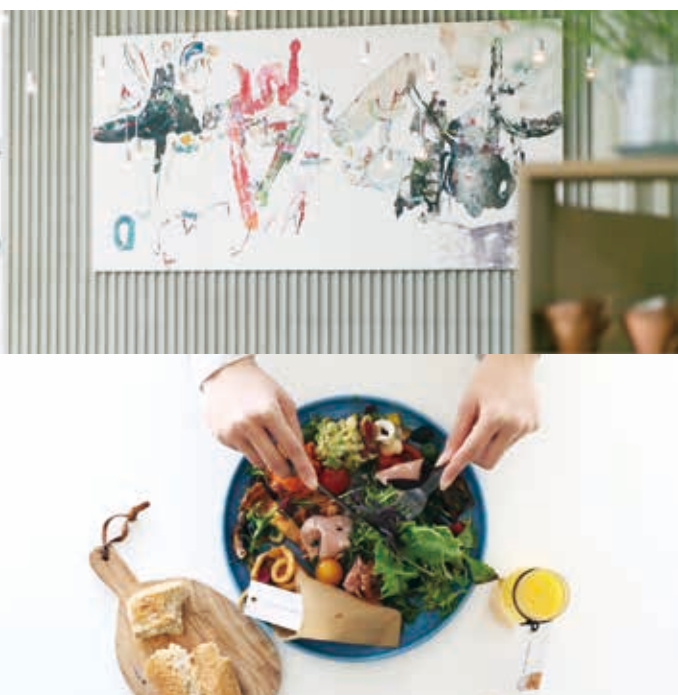
1960年代に製造・販売されていた「みやじま No.79」の復刻を軸に、現代の暮らしに合うブランドとして「マルニ 60」が誕生しました。

マルニ 60 を代表する「フレームチェア」は、一脚ごとに独立した組み立て式のソファです。暮らしや家族構成の変化に合わせて買い足したり、組み替えたりしながら、長く使い続けることができます。

フェザーとウレタンを組み合わせたクッションは、ふんわりと柔らかく、それでいて身体をしっかりと支える安定感のある座り心地。その心地よさに魅了される方も少なくありません。

ぜひ店頭にて座り心地をご体感ください。

営業時間 10:00 - 17:00
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
TEL 0564-83-5952 FAX 0564-83-5953
MAIL yagura@b-soup.com
HP https://b-soup.com/shop/yagura



YOUR TABLE

岡崎市美術館併設のカフェレストラン『YOUR TABLE』。ガラス張りの店内には太陽の光がいっぱい入り、お洒落で開放的な空間が広がります。ランチ時には景色を愉しみながらお食事を楽しむことができます。

カフェタイムにはケーキセットや軽食などを販売中。

営業時間 11:00～21:30 土日祝 10:00～21:30
定休日 月曜日(祝日の場合は営業。翌火曜日が振替定休日となります)
LUNCH 11:00 - (L.O.14:00) TEA 14:30 - 17:00 (L.O.16:00)
DINNER 18:00 - 21:30 (L.O.20:30)
TEL 0564-28-0141 HP https://your-table.owst.jp

30TH
ANNIVERSARY

OKAZAKI
MINDSCAPE
MUSEUM

岡崎市美術館

開館時間

午前10時～午後5時

※最終の入場は閉館時間の30分前まで

休館日

月曜日(祝日に該当する場合は、その翌日以後休日でない日)
年末年始

※展示替えのため臨時休館する事があります。

H P

https://www.city.okazaki.lg.jp/museum



表紙画像：酒井抱一〈十二月花鳥図〉江戸時代後期、出光美術館蔵

ARCADIA

OKAZAKI CITY
MUSEUM
NEWS

【岡崎市美術館ニュース／アルカディア】 第108号 2026年10月発行
編集・発行 岡崎市美術館
〒444-0002 愛知県岡崎市高隆寺町1番地 岡崎中央総合公園内
TEL 0564-28-5000(代表)